

（作品をお読みいただくにあたって）

本稿は、シナリオコンクール（第49回城戸賞）において、二次選考を通過したものの改編稿となります。

また、本稿には劇中劇、また登場人物の台詞として、長谷川伸傑作選『瞼の母』（国士俵入）を「長谷川伸傑作選『瞼の母』」（国書刊行会）から、原作者没後五十年を経過し著作権が失効しているため引用可と判断し、著作権法32条第1項に則し引用させていただきました。問題点等お気づきの場合をご指摘くださいませ。

主な登場人物

（年齢は登場時のもの。作中でも表記）

高野教平（16）山ヶ崎高校生徒

桑田蘭子（16）山ヶ崎高校生徒・教平の幼馴染

黒沢美花（18）山ヶ崎高校生徒・教平の先輩

奥原健介（18）右同

神田直人（18）右同

高野淑乃（39）教平の母親

桑田栄治（40）蘭子の父親

信代（39）蘭子の母親

黒沢敬造（63）美花の祖父

奥原玄次（63）健介の祖父

内橋（45）山ヶ崎高校教諭

末永（16）山ヶ崎高校生徒・教平の同級生

久保（18）山ヶ崎高校生徒

篠崎春雄（夢川春太郎）（45）夢川春太郎

一座座長

篠崎雅之（夢川恋太郎）（18）夢川春太郎

一座・座員 春雄の息子
田中（18）峰栄学園生徒

秋本真希（16）山ヶ崎高校生徒・教平の後輩

○居酒屋（ちぐさ）店前（早朝）

扉がしまってい、〈本日の営業は終了しました〉の札が出ている。

○高野家・居間兼台所（早朝）

ガスコンロの前で即席ラーメンを作つている高野教平（16）。百八十センチ、八十キロの体躯。太っている。鍋にスープをいれかき混ぜ、溶き卵も入れる。

×

×

×

テーブル席に座り、丼のラーメンを食べている教平。部屋の戸を開けて入っているパジャマにガウン姿の母親の淑乃（39）。あくびをしながら椅子に坐る。

淑乃「また卵入りラーメンかいな。そやから肥えるんやで」

無言のまま、ラーメンを食べ続ける教

平。ふふっと笑う淑乃。

淑乃「入学式、ちゃんと行くからな」

教平「来るなんか？」

淑乃「そらあ、行くわいな」

教平「そう」

淑乃「お父ちゃんにチンチンしてから行きや」

教平「うん」

淑乃「赤飯炊く家もあるんやろうなあ。ごめ

んやで」

ラーメンを啜る教平を微笑んで見てい

る淑乃。

○前同・仏間（早朝）

四畳半の仏間。小さな仏壇に位牌が一つとフォトスタンドに入った父親の写真。仏壇前に正座して鈴を鳴らし、手を合わせる教平。

○〈ちぐさ〉店前

店の扉を引き開けて出てくる教平。学生力バンを店の脇に置いていた自転車の荷台に括り付け、跨る。自転車をこぎだす教平。

○路上

自転車を漕いでいく教平。

○メインタイトル

〈銀木犀の樹の上で〉

○山ヶ崎高校・校門前

校門に「昭和六十二年度 山ヶ崎高校入学式」の立て看板。

自転車や徒步で校舎に入つて行く新入生たち。

在校生数人が声を上げて、自転車置き場へ新入生たちを誘導している。

○前同・自転車置き場

自転車を止める教平。ポールを挟んで女子の自転車置き場。そこに自転車を止める桑田蘭子（16）。教平に気づく。

蘭子「あ、教平ちゃん、おはよう」

教平「おはよう」

蘭子「昨日の夜もうちのお父ちゃんとお母ち
ゃん、お店にいってたんやで」

教平「みたいやな」

少し離れ、並んで歩き始める二人。

○前同・校庭

蘭子「子供が無事高校入った祝杯、三人であ
げたんやて。理由つけて「ちぐさ」で呑み
たいだけやん。けどほんま二人とも教平ち
ゃんのおばちゃんのこと好きやわ」

教平「あんな」

蘭子「ん」

教平「その『教平ちゃん』って言うのも

う」

蘭子「嫌なん」

教平「もう高校生になつたんやし」

蘭子「べつにええやん。教平ちゃんは教平ちゃんのまんま。小二の時靴隠されて、ピーー泣いてた教平ちゃんのまんまや」

教平「……」

蘭子「覚えてるか。あのとき靴隠したアホの末永見つけて、その靴であいつの頭思い切り叩いたん。おかげでこっちが先生とお母ちゃんにえらいこと怒られたんやから」

教平「忘れえや、そんなこと」

蘭子「わたしも『蘭ちゃん』のままでええで」

歩いて行く二人。

○前同・校舎入口付近・壁の前

壁に貼ってあるクラス表の前にたむろし、自分の名前を確認している新入生たち。教平、蘭子が表の前に立つ。二人、十組に自分の名前を見つける。

蘭子「十組やつて」

教平「うん」

蘭子「これで幼稚園からここまでずつといつ
しょの組やな。こういうのなんて言うんや
つたつけ。あんた前言うてたやん」

教平「……言うたら怒つたから言わん」

蘭子「怒らへんから言うてみつて」

教平「……腐れ縁」

蘭子「腐れ、とか言うな！」

教平の背中を思い切り叩く蘭子。

教平「そやから——なんなんや、ほんまに」

○前同・校舎入り口前・長机の前

長机が並べて置かれ、一組から十組ま
での紙が垂れ下がっている。

その前に男女別に並んでいる各組の新
入生たち。男子生徒は男子三年生から、
女子生徒は女子三年生から、胸にコサ
ージュを付けてもらっている。十組の
列最後尾に並ぶ教平と蘭子。

二人の番がくる。蘭子の胸にコサージュをつける黒沢美花（18）。美花、蘭子の胸の名札を確認する。

美花「入学おめでとう。桑田さん」

蘭子「あ、ありがとうございます」

美花の美貌に見惚れる蘭子。

美花「ん？」

蘭子「あ、いえ」

三年男子Aの前に立つ教平。長机の上、コサージュの入っていない小箱。

A「こっちもう済んだで、黒沢さん」

美花「え、あれ。なんでやろ」

教平「あの」

美花「あ、こっちの箱にあるわ」

コサージュをAに渡そうとする美花。

A「黒沢さんがつけたれや。あー、しんどか

った」

去ってしまうA。

美花「もう、しゃあないなあ。ほんまは男子は男子からつけてもらうことになつてるん

やけどわたしが付けてもかまへん?」

教平「あ、はい」

美花にコサージュをつけてもらう教平。

美花、教平の名札を見る。

美花「入学おめでとう、タカノ君」

教平「あ、コウノです」

美花「あ、そうなんや。ごめんね。じゃあ、

あらためて。入学おめでとう高野君」

教平「ありがとうございます」

ブツと吹きだす蘭子。美花、微笑んで。

美花「じゃあこの後は上履きに履き替えて、
体育館に行つてね。そこで先生の指示に従
つて」

校舎内へ去つていく美花。

蘭子「『ありがとうございます』

す』

教平「――うるさい」

蘭子「まあでも気持ちは分かる。ラッキーだ
ったやん。うわー、なんかいきなり憧れの
先輩できてしまふた感じやわー」

胸のコサージュを見る教平。

○前同・校庭

入学式終わり。校庭片隅に立つ銀木犀の樹の下に並んで立っている教平と淑乃。教平、樹に結わえつけてある「ギンモクセイ」と書かれた小さな板を手に取り見つめる。

桑田「はい教平ちゃんも淑乃さんも、こっち見て！」

蘭子の父栄治（40）がカメラを構えている。その隣に立っている蘭子と母親の信代（39）。

桑田「じゃあ撮るよ。はい、チーズ！」
シャッターを押す桑田。

○山ヶ崎高校・一年十組教室内

休み時間。クラスメイト四人と談笑している蘭子。白席に座つて文庫本を読んでいる教平。チャイムが鳴り教平の

斜め前の席に戻つて来る蘭子。本を閉じる教平。読んでいた筒井康隆の『メタモルフォセス群島』を閉じ、机にしまう教平。

蘭子「ツレのひとりも作らなあかんであんたも」

無言の教平。

蘭子「部活、なににするか決めた?」

首を横に振る教平。

蘭子「わたしは決めたで。ボランティア同好会や」

教平「ボランティアって、そんなん興味あつたんか」

蘭子「ぜんぜん。黒沢さんがいてるつて知つて決めた。今日入部届け出しに行く」

教平「黒沢さん」

蘭子「覚えてるやろ、入学式にコサージュ付けてくれた綺麗な先輩」

教平「ああ」

蘭子「美花さんって言うんよ。美しい花つて

書いて美花さん。名前まで素敵やわ。思わ
へん?」

教平「どんなことするんや、ボランティア同
好会って」

蘭子「知らんわ。ゴミ拾いでもするんちや
う」

教平「なにするか分からんのに入るんか」

蘭子「ええやんか。一発で憧れた先輩の居て
る同好会に入つてなにがあかんのん」

教平「ボランティアとか興味ないのにか」

蘭子「うるさいなあ。あんたは本ばっかり読
んで三年間帰宅部で終われ」

教師が入室し、教壇に立つ。起立の号

令がかかり立ち上がる教平と蘭子。

○前同・二階三年生棟廊下

放課後、帰宅する生徒、部活に向かう
生徒たちで賑やかな廊下。三年生たち
に物おじせず歩いて行く蘭子。

○前同・図書室内

書架に並んだ筒井康隆全集を前にたつ
ている教平。その顔に笑みが浮かぶ。

○前同・旧宿直室・入口

「ボランティア同好会・座員募集
中！」と書かれた札が扉にぶら下げら
れている。

蘭子「座員？」

訝しみながらノックをする蘭子。

男子生徒の声「うーい、開いてるでえ」

扉を開ける蘭子。

蘭子「失礼します」

部屋に入る蘭子。

○前同・旧宿直室・室内

入ったところがコンクリートうちつば
なしの三和土の靴脱ぎ。炊事場があり、
畳敷きの六畳間の上に座卓が置かれ、
その前で胡坐をかけてカップ麺を食べ

ている三年生男子、奥原健介（18）。

部屋の様子に驚く蘭子。

健介「入部希望者？」

蘭子「あ、はい。そうですが……あのここの
てボランティア同好会の部室ですよね」

健介「そうや。表に札出てたやろ」

蘭子「はあ」

部屋を見回す蘭子。

健介「ここ、もとは宿直室。教師が交代で学
校に泊つてた時代があつてな、部屋だけ残
つてるんや。水道も電気も通つてる。そや
からこないしてラーメンが食える」

カップ麺を啜る健介をじっと見る蘭子。

健介「ボランティアとか興味あるのん、自

分」

蘭子「あ、はあ、まあ」

健介「嘘つけ」

蘭子「嘘つて」

健介「美花にいてこまされたんやろ。黒沢美

花に。そやろ」

蘭子「『いてこまされた』つて」

健介「顔にかいてありまっせー。あいつなあ、小学校のときから、年下の女に人気あつたからな」

またズルズルと麺を啜る健介。

蘭子「——ええ、ええ、そうですよ。いてこまさされましたよ。入学式の日にコサージュつけてもらつて。わたしは綺麗なものが好きなんです、大好きなんです！」

畠然とした顔で蘭子を見る健介。

蘭子「だから綺麗な黒木先輩のいるボランティア同好会に入ろうと思つたんですつ。いけませんかつ！」

じつと蘭子を見ていた健介。フフツと笑う。

健介「自分、おもろいな。まあ突つ立つてんと上がりいや」

蘭子「——はい」

靴を脱いで六畳間に上がる蘭子。

×

×

×

差し向かいでシーフードヌードルを食べている蘭子と健介。

健介「旨いよなあこれ。初めて食べたときは

衝撃やつたで」

蘭子「はい。でもよく二個目とかいけますね、先輩」

健介「俺の血液の半分はラーメンスープでできている」

蘭子「それにしては細いですよね先輩」

健介「体質やろな。なんぼ食べても太らへんのや」

蘭子「わたしの幼馴染にも朝から袋のラーメン食べるやついますよ、卵落として。そんななんするからデブなんや」

健介「デブなん?」

蘭子「デブです」

健介「朝から卵入りの袋麺か。なかなかのプロフェッショナルデブやな、それは」

蘭子「『――プロフェッショナルデブ』」

ふたり、無言。やがてどちらからとも

なくクスクスと笑いだす。その笑いはやがて爆笑へ。

蘭子「明日、明日言うたろ。『あんたプロフェッショナルデブやで』いうて」

笑い続ける二人。

ドアが開く。美花が入ってくる。

唚然とした顔で二人を見る美花。マズツたという顔になる蘭子。笑い続ける健介。

×

×

×

座卓の前に座り、紙パックのコーヒー牛乳を飲みながら、サンドイッチを食べている美花。六畳間の隅で三角座りをして俯いている蘭子。クスクス笑つている健介。

健介「憧れの黒沢先輩やでー」

蘭子「再会はシーフードヌードルと共に」

蘭子、涙目で健介を睨む。

美花「ちょっと奥原、そんなにイジメンといつてあげてよ」

蘭子「あの、すみません、わたし……」

美花「なんにも。お腹いっぱい、元気いっぱい
い、ええことや」

蘭子「黒沢先輩、あの」

美花「なに」

蘭子「わたし、先輩にコサージュ付けてもら
つてほんまに嬉しかったんです。なんてい
うか——こんな綺麗な人いるんや、こんな
人にコサージュ付けてもらえたんやつて。
そやから、あの——なんか、変なこと言う
てごめんなさい」

美花「ううん。謝ることなんかなにもない
で」

健介「あー、なにを見せられてるんや、俺は

今」

蘭子「そやから、ボランティアとか、そんな
ん興味なくって。あの——先輩の近くに、
居てられたならあつて思つて。で、でも、
あの、レズとかそんなのじや、絶対なくつ
て」

健介 「愛の告白♪」

蘭子 「もう、うるつさい！」

健介 「おー、怖あ」

美花 「ありがとう、嬉しいで。なあ、桑田さ

ん」

蘭子 「はい」

美花 「ボランティア同好会って言つてるけど
な、特にボランティア活動やつてるわけと
ちがうのよ、わたしら」

蘭子 「え、じゃあ何を？」

健介 「見た？ 表の△座員募集中！△」

蘭子 「あ、はい。あの、座員つて」

美花と健介、顔を見合わせ笑う。

美花 「桑田さん自転車通学？」

蘭子 「そうですけど」

美花 「そつか。じやあ腹ごしらえも済んだこ
とやし、出かけますか。そこで入部するか
どうか決めたらええわ」

サンドイッチを食べ終えて立ち上がる
美花を見上げる蘭子。

○〈ちぐさ〉 店前

扉に準備中の札が下がつてている。

自転車に乗って帰つて来る教平。店脇に自転車を止め、扉を開けて中に入る。

○前同・店内

厨房で仕込みをしている淑乃。

淑乃「おかえり」

教平「ただいま」

店内を通り、家屋部へ行こうとする教平。

淑乃「教平」

立ち止まり、淑乃を見る教平。

淑乃「あんた、大学行きたいんやろ」

教平「なに、急に」

淑乃「もうすぐ三者面談やろ。進学するんか

か就職するんか、先生に訊かれて、親子の
言うことが違つてたらあかんやろ」

教平「——就職するよ」

淑乃「大学行って、文学勉強したいんやろ」
じつと淑乃を見つめる教平。

淑乃「奨学金いうのもある。それにお父ちゃんの保険金もまだ遺してある。それで大学に行つたらええ。あんた、頭悪いことないんやし。けど、できたら国立がええな。しつかり勉強してや」

教平「——うん」

家屋部へ歩いて行く教平。

○高野家・教平の部屋

勉強机の椅子に腰かける教平。学生力バンから、筒井康隆全集の一冊を取り出し読み始める

○路上

健介、蘭子、美花が自転車をこいでいく。

○青原地区公民館・前庭

コンクリート造りの二階建て、古びた
感のない公民館。入口に「青原公民
館」の看板。

乗り着ける三人。自転車を止め、降り
る。

美花 「そしたら、入ろうか」

蘭子 「ここに、ですか」

健介 「ここに来て、ここに入らんで、どこに
入るんや」

ギロつと健介を睨む蘭子。

健介 「おー、怖あ」

公民館の中に入つて行く三人。

○前同・二階の大広間

中年から老齢の男女合わせて十人ほど
が、わざわざと動いている。

美花 「こんにちはー」

挨拶を返す男女たち。スリッパを脱ぎ
中に入る美花。健介も。蘭子も二人に
続いて。

蘭子「あの先輩、ここって」

美花「ここでね、大衆演劇のお稽古してるの。

名前は山ヶ崎青原一座。そやから座員募集
っていうわけ」

蘭子「大衆演劇」

美花「見たことないよね」

蘭子「はい」

美花「わたしのおじいちゃんがここリーダー
ー、座長で、奥原のおじいちゃんが副座長。
わたしらね、幼稚園の頃から子役で市民文
化祭の舞台に出てるんよ」

健介「ジジィの道楽に付き合わされてかなわ
んで、ほんまに」

美花「よう言うわ」

蘭子「それがボランティア同好会のほんまの
活動ですか」

美花「うん。おじいちゃんがね、部活になつ
たら学校でも公演打てるやろ、言うて。そ
やから去年の文化祭、講堂で公演したんや
で」

健介「演目は『臉の母』。市民文化祭の方は『名月赤城山』。ちなみに両方とも主役は俺」

蘭子「先輩が主役」

頷く健介。壁に立てかけてあつた模造刀を手に取り、前に突き出しグッと見栄を切る。注目が集まる。

健介「『赤城の山も今宵を限り、生まれ故郷の國定の村や、繩張りを捨て国を捨て、可愛い子分の手めえ達とも、別れ別れになる首途だ』」

座員たちからの喝采。蘭子を見てニッと笑う健介。驚いている蘭子。

美花「どない、桑田さん」

蘭子「え、あ、はい。今の先輩、ちょっとかっこよかったです」

健介「ちょっとかい」

蘭子「そやけど、そんなん見たの初めてなんやもん」

奥の扉が開き、入つて来る美花の祖父、

黒沢 敬造（63）と健介の祖父、奥原

玄次（63）。

玄次「そやから駒形茂兵衛は儀がするつて言うとるやないかっ！」

敬造「何回言うたらわかるんじやつ。どこにな、こんなトウの経つた駒形茂兵衛がいてるんじや！」

玄次「トウが経つたとか言うなつ。体型からして儀しかいてへんやないか！」

敬造「ええか、よう聞け玄の字。駒形茂兵衛はな、破門された親方のところへもう一回弟子入りしようと心に決めて、駒形村から出てきた取的やぞ。腹へってやつれはてても、再出発を誓った志のある青年や。横綱になつて、母親の墓前で土俵入りの晴れ姿を見せたいいう夢持つた青年や。その青年が酌婦のお薦と出会う。茂兵衛の志に打たれたお薦が唄う小原節、それは茂兵衛の若さあつてこそ観る者の胸を打つんじや。それこそが芝居のリアリティーじや。分かつ

たか！」

玄次「カバチたれなあつ！」

敬造「なにがカバチじやつ。ははあん、分かつたぞ玄の字。さてはおまえ孫にばっかり主役張られて悔しいんやな。それで駒形茂兵衛やりたいんやな。え、そういう不純な動機やな。どや、団星やろ。言うてみい」

玄次「ぐつ……そんなこと、そんなことあるかあつ！」

敬造につかみかかる玄次。

敬造「やるんかい！」

応戦する敬三。

玄次「おう、やつたらあ！」

慌てて二人を引き離す座員たち。その様子を呆然と見ている蘭子。

美花「いつもこんな調子」

健介「ほんま、毎度毎度ようやるわ」
ドカツと床に腰を落とす敬造。荒い息を吐いている玄次を見上げて。

敬造「玄の字」

玄次「なんじやい」

敬造「おまえほんまに自分が駒形茂兵衛やつてええ芝居にする自信はあるんかい」

玄次「——そら、あるわい」

敬造「ほんまにか」

玄次「それは……」

敬造「そやろが。なんぼ体型が相撲取りに近いからいうて、それだけでは駒形茂兵衛はおまえにや務まらんわい」

後ろに身を倒す敬造。天井を見上げる。

敬造「やつぱり今年の市民文化祭の演目は『瞼の母』でいく。主役は去年に続いて健介や——あー、夢やつたんやけどなあ『一本刀土俵入り』やるのなあ。もう一生無理かもなあ」

蘭子、美花を見て。

蘭子「あの、先輩」

美花「なに」

蘭子「お相撲さんが出てくるんですか、その

お話しって」

美花「うん、わたしも原作読んだけど『一本

刀土俵入り』は主役が駒形茂兵衛って取的

——お相撲さんの見習いでね、一回は親方に破門されてね、けどやつぱりやり直そつて思つて、その戻る途中にヤクザに絡まれてしまふ。そこをお薦つて女の人に助けられる。で、その何年後かに現れたときには、お相撲さんやめてヤクザ者になつてるんやけど、今度は茂兵衛がお薦を助けるつていう、ざつと言えばそんなお話し」

健介「ざつとすぎるやろ」

蘭子「そうですか。お相撲さんやから太つてるんですよね」

美花「そらね」

蘭子「見習いやから若いんですよね」

健介「そや。そやからうちのじいちゃんにはできんわけよ。やりたがつてるけど絶対無理。敬造さんの言うことが正解」

蘭子「なんですか——あの」

仰向けになつたまま顔を上げる敬造。

蘭子を見る。

敬造「なんや、新顔やな」

蘭子「初めまして。今日からボランティア同好会に入った桑田蘭子って言います」

健介「入るんか」

蘭子「もちろんです。あの、ここつて電話ありますか」

敬造「電話？一階の事務所にあるわ」

蘭子「そうですか。じゃあお借りします」

大広間を出て行こうとする蘭子。

美花「あの、桑田さん」

美花を見てニカツと笑う蘭子。

○高野家・教平の部屋

読書に夢中の教平。ドアがノックされる。

教平「なに」

ドアを開ける淑乃。手にした電話の子機を差し出す。

淑乃「蘭子ちゃんから電話」

教平「へ？」

淑乃「早よ出たげえな」

訝しげに子機を手に取る教平。

○路上

えつちらおつちらという感じで、自転車をこいでいく教平。

○青原地区公民館・前庭

蘭子たち三人の自転車が停まっているのを認める教平。降車し自転車を止め、汗をぬぐいながら入口へと向かう。

○前同・二階の大広間

恐る恐る扉を開ける教平。

蘭子「遅い。皆さん待ちくたびれてるで」

教平「な、なんなん?」

蘭子「ええから入りいな、早よ」

スリッパを脱ぎ、大広間に入る教平。

健介「なるほど、プロフェッショナル・デ

」

蘭子「でしょ」

教平「あの桑田さん」

蘭子「そやから蘭ちゃんでええって言うてる

やん」

美花「お久しぶり、高野くん」

美花を見る教平。

教平「あ、はい。あの、これって」

敬造が教平のそばまでやつて来る。全身を舐めるように見て。

敬造「なるほど。確かにええ感じに肥えとる」

教平「あの、なんなんですか」

敬造「ぼく、こっち来い」

奥の扉の方へ歩いて行く敬造。立ちつくしている教平。

敬造「なにしてんのや、来んかいな」

蘭子「ほら、早よ行き」

教平の背中を叩く蘭子。

教平「ほんま、なんなんや……」

仕方なく敬造の後についていく教平。

○お好み焼き屋 くじやく 店前

暖簾が出ている。

○前同・店内

正方形の鉄板が敷かれたテーブル席。

椅子に坐っている教平、蘭子、美花、健介。鉄板の上でお好み焼きが四つ、焼けている。教平の前の前のお好み焼きにソースを塗りたくる蘭子。

蘭子「あきらめ。見込まれたんやあんたは」

教平「なんなんやそれ……ほんまいきなり電話かけてきてから」

蘭子「電話なんかいきなりかけるもんやないの。手紙書いてからかけるんか」

教平「あんなあ……」

蘭子「ドブネズミ色になりそなあんたの高校生活を救つたろって思つたんやないの。感謝してほしいわ」

教平「ほつといてくれ」

蘭子「ほら、焼けてんで。先輩からの奢りや。

ありがたくちようだいしなさい」

美花「いつつもそんな感じなん」

蘭子「え」

美花「いや、ええコンビやなつて」

教平「ただの腐れ縁です」

蘭子「それ言いな！」

お好み焼きを食べ始める四人。

健介「敬造さん、なんて」

教平「はい？」

健介「隣の部屋つれて行かれたやろ。そこで
なに言われたんや」

教平「はあ——服脱げ言われて、脱がされて。

そんで、なんや、ただの肥えた子やな、と
か言われて。しゃあない、ナントカ茂兵衛
はぼくに決めたから、とか言われて」

美花「ごめんね、うちのおじいちゃん失礼な
ことばっかり言うて」

教平「いえ……ほんま、ただの肥えた子やか

ら、ぼくなんか」

蘭子「ね、今まで分かったでしょこいつのこと。『ただの肥えた子やから、ぼくなんか』——アホか！」

うつむく教平を見る美花と健介。

蘭子「ほんま嫌いや、あんたのそんなとこ」「

お好み焼きを頬張る蘭子。

美花「断つてくれてええんよ、高野くん」

蘭子「そんな先輩」

美花「こういうことは本人の意思がいちばん大事やで桑田さん」

蘭子「そうやけど……」

教平「ぼく、演劇なんかやつたことないし、べつに興味もないし。それに、ぼくなんかがやつたって、みんなの足引っ張るだけやしだす昔からずつとそうやつたし」

ため息をつく蘭子。

蘭子「ダメだこりや。すみません先輩こんなのが呼び出して。わたしが間違つてました」

健介「やつたことないから、やるのどちがう

んか？」

教平「え」

健介「そんなもんちやうんかな」

教平「……」

美花「高野くん、他にはなにか言われへんかった、おじいちゃんに？」

教平「はあ——相撲の稽古やれって。そこで、

ナントカ茂兵衛のリアリティー出せって」

美花「やつぱりなあ。そういうこと言うつて

思つてたわ、おじいちゃん」

教平「相撲とかそんなん、もつと興味ないし。

ぼく、運動神経悪いし」

蘭子「あんた今ここでちゃんと断り。ほんま、あんた呼び出したわたしが間違えてたわ。

ムカムカするわ」

美花「桑田さん、答え急ぎすぎ」

健介「ほんまおもういわ、自分」

お好み焼きを食べる四人。

店から出てくる四人。

美花 「高野くん」

教平 「はい」

美花 「ほんまに断つてくれてええんやからね。
けど、そうやな。三日くらいゆつくり考え
てみて。そんでから返事して」

教平 「はあ」

健介 「高野」

教平 「はい」

健介 「明日放課後、時間あるよな」

教平 「え？ あ、まあ」

健介 「ちょっとつきあつてくれ」

教平 「はあ」

蘭子 「そしたら先輩、今日はごちそうさまで
した。ほら、帰るで」

自転車に跨り、並んで去っていく教平
と蘭子。二人を見送る美花と健介。

美花 「高野くん、桑田さん！」

自転車を止める二人。美花を見る。

美花 「桑田さんありがとう。高野くん呼んで

くれて。高野くん、高野くんやつたらできるよ駒形茂兵衛。お薦はな、わたしがやるんよ。なあ、いつしょにやろうや。わたし高野くんといっしょにやりたいな『一本刀土俵入り』！」

蘭子、教平の背中を強く叩く。会釈する教平。二人、また自転車をこいで去っていく。小さくなるその後ろ姿を見送っている美花と健介。

○〈ちぐさ〉店内（夜）

閉店後、厨房内で洗い物をしている淑乃。屋内へ通じる扉から顔を出す教平。和装の寝間着に腹巻をしている。

淑乃「なんやあんた、まだ起きてたんかいな」

頷く教平。

× × ×

カウンター席の椅子に坐り、淑乃の作つたおじやを食べている教平。

淑乃「先輩らとお好み焼き食べたから、ご飯要らん言うたの、どこの誰や」

教平「——時間が早すぎたわ」

ハフハフしながらおじやを食べる教平。

教平「なあ、オカソ」

淑乃「なんや」

教平「ただの『肥えた子』なんかな、ぼく」

淑乃「誰かにそんなこと言われたんか?」

教平「黒沢先輩のおじいちゃんと、あと一

」

淑乃「あと?」

教平「自分」

おじやを食べる教平をじつと見る淑乃。

淑乃「こら、教平」

淑乃を見る教平。

淑乃「たしかにわたしは肥えた子産んだ覚えはある。けど『ただの肥えた子』産んだ覚えはない」

見つめ合う親子。淑乃、フフツと笑う。

またおじやをハフハフ食べる教平。洗

い物に戻る淑乃。

○山ヶ崎高校・小運動場隅・土俵

放課後、ソフト部やハンドボール部が練習をしている小運動場。その隅にある土俵の上、まわし姿の神田直人（16）と顧問の内橋（45）がぶつかり稽古をしている。小柄な直人だが、筋骨隆々たる体型。巨漢の内橋に投げ捨てられては、すぐさま立ち上がり向かっていく。真っ赤になっている二人の胸板。

その様子を土俵下から見ている教平と直人。

健介「神田直人。幼稚園からのツレや」

教平「はあ」

健介「その頃から相撲が好きでな。ほんまはな、峰栄学園の相撲部に行くのが夢やったんや」

教平「峰栄の相撲部ですか」

健介「うん。けど、無理やつた。あそこ私学
やろ」

教平「はい」

健介「小五のときに父親が交通事故で死んで
な、おまえといっしょの母子家庭や」

教平「——」

健介「昨日の夜桑田から電話で聞いた。おま
えのところは病気らしいけど」

教平「——あのしゃべり」

健介「卒業したら知り合いのやつてる板金工
場に就職すること決めてるんや、こいつ」

教平「——あの」

健介「なんや」

教平「なんで相撲続けるんですか、この人。

他に部員もいてへんのに」

健介「それは——まあ、本人の口から聞いて
みてくれ」

教平「はあ」

健介「高野」

教平「はい」

健介「昨日の電話で、俺、桑田にコクッた
で」

教平「え」

健介、直人の稽古をじつと見つめたま
まで。

教平「そうですか。蘭——桑田さん、なん
て？」

健介「『少し考えさせてほしい』いうてな。
けど、うんつて言うまであきらめるつもり
はないけどな」

教平「そうですか」

健介「取つてしまふで、幼馴染の蘭ちゃん」

教平「そんな——あいつとはほんまにそんな
んとはちがいますから」

健介「そうか」

内橋に立ち向かっていく直人をじつと
見つめる教平。

○〈くじやく〉店内（夜）

鉄板席を前に座っている教平、直人、

内橋の三人。教平の前には焼きそば。
内橋は焼いたスルメをアテにビールを

飲んでいる。山盛りになつた肉野菜炒
めを食べながら、どんぶり飯をかきこ
んでいる直人。

内橋「『一本刀土俵入り』か。長谷川伸。池

波正太郎のお師匠さんやな」

教平「え」

内橋「『鬼平犯科帳』読んだことあるか」

教平「いえ」

内橋「読んどけ。今はなにを読んでるのや」

教平「あの、先生」

内橋「長いこと現国教えてるとな、顔見たら
本読んでるやつか、そうでないやつかは分
かるんや」

教平「筒井康隆、読んでます」

内橋「中学のとき、星新一のショートショー
トから入ったか」

教平「あ、はい。そうです」

内橋「うん、二人ともなんちゅうか一種の天

才やな。けどな高野よ。池波と司馬遼太郎
と山田風太郎と山本周五郎読め。若いとき
に時代小説読んどけ。損するぞ」

教平「あの、先生」

内橋「なんや」

教平「文学作品とかは?」

内橋「そんなもん年いってからでも読めるや
ないか」

教平「逆どちがうんかな……」

笑って旨そうにグラスのビールをあお
る内橋。黙々と肉野菜炒めを食べる直

人を見る教平。

内橋「相撲も演劇もやつてみるか、高野よ」

教平「え」

内橋「俺もぼちぼち一人でこいつの相手する
の、しんどなってきた」

教平「けどぼく、運動神経悪いし」

チラッと教平を見る直人。また食事に
戻る。

教平の額に軽くデコピンをする内橋。

教平「つつ」

内橋「昔ながらの文学青年やなあ。あんな、本をよう読むやつはな、そうやつて自分自身を限定させすぎるところがあるんや。本も読んで、相撲もやつて、演劇もやる。

『へ人のできない、ことをやれゝ』や」

黙々と食べ続ける直人を見る教平。

○高野家・教平の部屋（夜）

ベッドの上、横になつて本を読んでいる教平。ドアがノックされる。

教平「なに」

ドアを開ける淑乃。

淑乃「神田さんって方が来てるよ」

教平「え？」

本を置く教平。

○「ちぐさ」店前（夜）

向かい合つて立っている教平と直人。

直人「すまんな、こんな時間に」

教平 「いえ、あの」

直人 「高野」

教平 「はい」

直人 「さつきはよう言わんかつたけど、ちゃんと言ふ。それ言いにきたんや——俺の稽古の相手になってくれ。頼む」

深く頭を下げる直人。

教平 「先輩……」

頭を上げる直人。

直人 「高野、俺な、勝ちたいやつがいてるんや」

教平 「勝ちたいやつ」

頷く直人。

直人 「今年が最後のチャンスなんや」

真剣な顔つきの直人をじっと見つめる

教平。

○山ヶ崎高校・旧宿直室前

ドアをノックする教平。

美花 (声) 「はーい」

教平 「失礼します」

部屋に入る教平。

○前同・室内

六畳間の窓際に立っている美花。

美花 「あら」

会釈をする教平。

×

×

六畳間、座卓を挟んで座りカレーヌードルを食べている教平と美花。

美花 「カレーヌードルってな、時々猛烈に食べたらならへん」

教平 「え」

美花 「あと、あんドーナツとか、そやね、ハッピーターンとか」

教平 「たしかに、ですね」

美花 「そやろお。けどほんまにおいしそうに食べるね、高野くんって」

教平 「そう、ですか」

美花 「うん。ものおいしそうに食べる人に悪

い人はいてへん。わたし、そう思つてるん
よ」

教平「はあ」

美花「奥原と蘭子ちゃん、今頃いつしょに帰
つてるんやろなあ。手え繫いでたりして—
—かまへんのん?」

教平「桑田さんは、ほんまにそんなんとち
がいますから」

美花「ふーん。まあ分からんでもないよ。わ
たしも奥原とはそんな感じやし」

教平「はあ」

美花「相撲の方はどうするん。奥原といつし
ょに見学に行つたんやろ」

教平「——やつてみようかつて思います。ぼ
くにどこまでできるか分からへんけど」

美花「そつか。神田君、無口でキツイ目えし
てるけどええ人やで。去年のわたしらの舞
台にも、チョイ役で出てくれたんやで」

教平「神田先輩ですか」

美花「うん。なあ、高野くん」

教平 「はい」

美花 「なんか、巻き込んでしもうたかな」

教平 「いや、べつにそんなことは」

美花 「高野くん、絶対ええ駒形茂兵衛やれるわ。なんか分かるんよ、わたし」

教平 「でも、ほんまにぼくなんかでええんですか」

美花 「それ、禁止な」

教平 「え」

美花 「『ぼくなんか』っていうの、わたしの

前で言うたら一回につき罰金百円没収や」

美花を見つめる教平。微笑んでいる美花。

花。

教平 「——はい」

美花 「うん」

カレーヌードルを食べ続ける二人。

○青原地区公民館・大広間

長机を前に座り『一本刀土俵入り』の読み合せをしている出演者たち。

教平、つつかえつつかえの棒読み。

玄次「おいおおい、ほんまにこの子で大丈夫
かあ」

敬造「黙つてい、玄の字！」

俯く教平。横に座つた美花が。

美花「高野くん気楽に気楽に。最初から上手
にできる人なんかいてへんのやからね」

教平「はい、すみません……」

美花「リラックス、リラックス」

微笑む美花を見つめる教平。

○山ヶ崎高校・体育倉庫

体育倉庫の中、全裸になり内橋にまわ
しを付けてもらっている教平。股間を
手で隠している。

内橋「ほらあ、チンポから手えのけんかい」

恥ずかし気に股間から手を離す教平。

○前同・小運動場・土俵

まわし姿で土俵上にべたりと坐つてい

る教平。開脚を試みようとするが全くできない。その背を軽く押す直人。

教平 「いででででっ！」

内橋 「硬い体やなあ」

笑う内橋。悲鳴を上げ続ける教平。

× × ×

土俵周りを足を大きく開いてすり足で回る直人。それに続いて教平も。教平、まったく不格好。その様を見て、トラックを周回していた女子陸上部員たちがクスクス笑いながら走っていく。

○高野家・教平の部屋（夜）

寝間着姿でベッドに横になり、文庫本を読んでいる教平。寝返りをうつ。

教平 「あたたたた……」

上半身を起こし、太股をさする。深いため息をつく教平。

○山ヶ崎高校・自転車置き場

放課後。帰ろうと自転車に跨りかける教平。その後ろからやつてくるボンタンズボンをはいた同級生の末永とA、B、C、Dのヤンキー生徒五人組。

末永「高野くんっ」

末永、馴れ馴れしく教平の肩を抱き寄せる。ビクつとなる教平。

末永「そんなんビビらんでもええやん。ちっさい頃からの仲なんやから。なあ」

教平「あ、あの、なに」

末永「俺な、幼稚園のとき、ふざけてこいつの靴隠したことがあつてな。ほんで俺、その靴でな、同級生の女に思いつきり頭どつかれたことがあつてやあ。なあ」

A「女にか」

末永「おう、こいつといつしょの十組の桑田蘭子や。めっちゃ痛かったわ。今でも覚えてるわ。こいつ後ろでグズグズ泣いてただけやつたけど。なあ」

笑う四人。

末永 「高野、ちょっとつきあつてくれへん。

俺らの先輩が話しあるって言うてるんや」

教平 「は、話って」

末永 「来たら分かるから」

末永に肩を組まれたまま連れて行かれる教平。

○前同・校舎裏

たむろしている久保（18）らヤンキー生徒五人。その前に教平、末永らにひきずり出されるようにして。

久保 「名前、なんて言うんやつたつけ」

末永 「高野です。高野教平」

久保 「おまえに訊いてへんやろが、ボケ」

末永 「すみません」

久保 「おまえ、演劇の一座に入つたんやつてな。青原の公民館でやつてる」

教平 「——」

久保 「訊いてるんやけどな」

教平 「はい」

久保 「芝居とか興味あるんか」

教平 「いえ、べつに」

久保 「興味ないのになんで入つたんや」

教平 「それは」

久保 「当てたろか。黒沢先輩が目当てや。え、そやろ」

教平 「そんな、ちがいます」

久保 「ほんまにかあ」

教平 「ほんまです」

久保 「それやつたらええんやけどな。あれ、俺の女やから」

とりまきからドツと笑いが起きる「ちがうやんけ」の声。

久保 「うるさいわっ。俺の女にするんじやつ——おまえまでなにを笑とるんじや！」

末永にビンタをする久保。

末永 「すみません」

久保 「おい、クソデブ。おまえみたいなブタがよ、黒沢といっしょに青原の公民館行つてゐるの見るだけでクソムカつくんじや。ボ

ケ!』

教平の腹に膝蹴りを入れる久保。

久保「奥原のガキはショーンベン臭い一年と付き合い始めたいうて聞いたから、安心しつたのによ。ええかクソデブ。黒沢美花は絶対俺の女にする。よう覚えとけ」

立ち去る久保らヤンキー集団。

教平、腹を押さえ地面に寝転び、苦悶し続けている。

○山ヶ崎高校・旧宿直室・室内

六畳間に座っている美花、健介、蘭子。三和土に立つて俯いている教平。

美花「やめたい理由、教えてくれる?」

教平「それは——やつぱりぼくには向いてないって思うし。足引つ張つてただけやし」

健介「相撲はどうするんや。神田から練習休んでるつて聞いたけど、そつちもやめるんか」

小さく頷く教平。

蘭子「ほんまの事言いや」

蘭子を見る美花と健介。

蘭子「こないして下向いてボソボソいうときは嘘ついてるときなんです。なあ、昔からそうやんなあ！」

教平、俯いたままでいるが。

教平「なんで……なんでクソデブとか言われなあかんのや……なんで、なんでブタとか言われて蹴られなあかんのや！」

うずくまり、すすり泣き始める教平。

美花「高野くん、なにがあつたん？」

嗚咽する教平を見つめる三人。

○路上

学校からの帰路。同級、下級生のヤンキー集団を引き連れ帰っている久保。

美花「久保君」

後ろから声をかける美花。振り返り美花を見てにやける久保。

久保「黒沢あ」

美花「あんた、えらいうちの一座の後輩かわ
いがつてくれたみたいやないの」

久保「ん?——ああ、あのデブか」

美花「久保君、あんた一か月くらい前にアサ
リに当たつて、市民病院に救急車で運ばれ
たやろ」

久保「おまえ、なんでそんなこと」

美花「大騒ぎやつたって聞いたで。『お母さ
ん、お母さん、お腹痛い、痛いい!』いう
て」

久保「……そんなこと、あるか。なにをデタ
ラメ言うとるんや」

美花「知ってるんよ。おつきいお姉ちゃん、
あそこの看護婦してるから。最初にあんた
の手当したの佳代姉ちゃんなんよ」

久保「……」

美花「『カラの大きな子がお母さん、お母さ
ん、言うて泣きわめいてかわいらしかった
わ』言うて佳代姉ちゃん笑つてたわ」

久保「……」

美花「はつきり言うわ。つきまとわんといて。今度また高野くんにひどいことしてみ、今のは話し言いふらしたるから。ボンタンはいてイキがってるヤンキーの久保は、どえらいマザコンやつて、学校中に言いふらしたり——分かった？」

久保「黒沢、おまえ」

美花「気安う呼び捨てにせんといて。わたしはあんたが大嫌いや。中身スカスカなくせにイキがってるあんたみたいな人間、ほんまに嫌いや。顔見るだけでゲー出そうや」

言い放ち立ち去る美花。

立ち尽くしている久保。やがて叫び声上げて、末永たち後輩にビンタをくれ、蹴りを入れ始める。

○山ヶ崎高校・小運動場・土俵

土俵の周囲をすり足で回っている。まわし姿の直人。その様子を見ている内橋。

内橋 「高野はやつぱりケツ割つてしまふた
か」

すり足を続ける直人。やがてその足を
止め内橋を見る。

直人 「あいつは、戻ってきます」

内橋 「そない思うか」

直人 「はい」

またすり足で土俵周囲を回る直人。

○前同・中庭

速足で歩いている蘭子。その少し後ろ
をトボトボ俯きがちに歩いている教平。

蘭子振り返つて。

蘭子 「ほら、サカサカ歩かんかいな」

俯いて立ち止まる教平を見てため息を
つく蘭子。

蘭子 「ほんまに——あんたなあ、もうそろそ
ろやな、自分のお尻は自分で拭くようにな
らんとあかんで、ほんまに。幼稚園のとき
はわたし。今度は美花さん。全然成長して

へんやん。もうちょっと性根入れ！」

教平「——うん」

蘭子「ほら、行くで！」

速足で歩きだす蘭子。トボトボついていく教平。

○前同・小運動場・土俵

すり足を続いている直人。そこへやつてくる教平と蘭子。内橋が二人に気づく。

内橋「お、神田のいうことが当たったわ」

内橋の傍に来て会釈する教平。内橋、蘭子を見て。

内橋「なんや高野、おまえ彼女いてたんか。
スミにおけんな」

蘭子「やめてください先生。わたしはこのへ

タレが逃げへんよう連れてきただけです」

内橋「ははっ、そうか。高野、続けるか相撲？」

黙つたままの教平。

蘭子「ほら、先生訊いてるやん。ちゃんと答
えんかいな」

小さく頷く教平。

教平「勝手に休んでもいいませんでした」

内橋「よつしや。そしたらまわしつけに体育

倉庫行こか」

体育倉庫へと歩きだす一人。内橋振り
返って蘭子を見て。

内橋「見に来るか？」

蘭子「行くかあっ！」

大笑いする内橋。ムツとした顔で遠ざ
かる二人の後ろ姿を見ている蘭子。

蘭子「ほんまに、いつまでたつても世話のか
かる子やで」

ため息をつく蘭子。直人と目が合う。
直人、一瞬の笑みを見せる。

蘭子「え」

真剣な顔ですり足を続ける直人を見つ
める蘭子。

○青原地区公民館・大広間

入つて行く教平。

座つて畳の上にポスターを広げている
健介。その周りに美花、蘭子、敬造、
玄次ら座員たちも座つて『夢川春太郎
一座公演』の文字が躍るポスターを見
ている。

敬造、教平に気づき顔を上げて。

敬造「『森の石松』や今年は。いよいよ息子
が主役を張るか」

蘭子も上気した顔を上げて。

蘭子「健ちゃん、卒業したらこの劇団に入
るんよつ、もう決めてるんやつて！」

美花も教平を見る。

美花「来月あさかパラダイスでやるんよ。み
んなで観に行くんよ。高野くんも行くや
ろ」

夢川春太郎と息子恋太郎が写されたポ
スターをじっと見ている教平。やがて
小さく頷く。

○路上

走るマイクロバス。

○マイクロバス・車内

山ヶ崎青原一座全員が乗っている。
並んで座っている教平と美花。

美花 「高野くん」

教平 「はい」

美花 「あんな、高野くんだけには言うところ
て思つてな」

教平 「え、なにをですか」

美花 「わたしな、つきあつてる人いてるん
よ」

教平 「——そうなんですか」

美花 「うん、両親にも言うてへん。おじいち
やんも知らへん。けど、なんかな、なんか
高野くんには知つてほしかったんよ。そ
やから、今、言うた」

教平 「はあ」

美花 「ほら、なんて言うたって、お薦と茂兵

衛やる仲やもん」

教平 「はあ」

美花 「二人だけの秘密や」

微笑む美花を見つめる教平。やがて頷

く。

○あさかパラダイス・駐車場

大型ヘルスセンター、あさかパラダイスの駐車場に停まるマイクロバス。

敬造を先頭に降りてくる一座の面々。

○前同・大劇場

舞台では夢川春太郎一座公演『森の石松』が演じられている。石松を演じる春川恋太郎こと篠崎雅之（18）。

都鳥一家に惨殺される場面を鬼気迫る様で演じる雅之。

●石松の遺髪をしてにして涙し、仇討ちを

誓う春太郎こと篠崎春雄（45）が扮

する清水次郎長。

● クライマックス、清水一家と都鳥一家の決闘場面。座員たちの華麗かつ迫力のある殺陣。

やがて次郎長と都鳥吉兵衛のサシの勝負へ。吉兵衛を討ち果たす次郎長。

次郎長、刀をかざし。

次郎長（篠崎）「石松、仇は、仇はこの次郎長がとつてやつたぞ！」

客席から万雷の拍手。教平も夢中で拍手をする。

○前同・研修室前廊下

春太郎一座が楽屋として使つてる研修室。その前で待つてゐる教平、蘭子、美花、健介。楽屋から出てくる雅之。続いて春太郎も。

雅之「健ちゃん、久しぶり！」

健介「雅之くん」

二人、笑いあう。

健介「よかつた。すごくよかつたよ雅之くん
の森の石松」

雅之「ありがとう」

雅之、蘭子を見て。

雅之「この子が電話で言つてた彼女？」

健介、はにかみながら頷く。

蘭子「はい、桑田蘭子です。お芝居とつて
も感動しました！」

雅之「ありがとうございます。元気いいね。健ちゃんの
ことよろしくね」

蘭子「はい、よろしくお願ひされました！」

雅之「あははっ、面白いなあ、きみ」

篠崎「奥原君、決意は変わらないんだね」

健介「はい」

篠崎「そうか。一からの修行になる。旅役者
とはいえ、わたしたちはお客様からお金を
頂戴するプロだ。厳しく仕込むよ。その上
で下働きもやってもらう。いいね」

健介「はい、分かっています」

篠崎「うん。じやあ卒業前にご両親といっし

よに挨拶にきなさい。そのときに正式に入

座を認めてあげるから」

健介「はい、ありがとうございます」

頭を下げる健介。

雅之「よかつたね健ちゃん。でも彼女とはめ
つたに会えなくなるよ」

蘭子「承知の上です！」

雅之「『承知の上』かあ」

場が笑いに包まれる。

美花を見る篠崎。

篠崎「黒沢さんも久しぶり。一年見ないうち
に、女っぷりに磨きがかかつたんじやない
かい」

美花「素直に受け取っておきます」

春太郎「卒業後はどうするんだい」

美花「大学に進む予定です」

篠崎「そうか。花の女子大生ってやつだね。

いいかい、学生の本分は勉強だ。そこを忘
れちゃいけないよ」

美花「はい」

篠崎、教平を見て。

篠崎「お、新顔だね」

蘭子「ほら、教平ちゃん、ちゃんと挨拶して」

教平「——初めまして。高野教平といいます。

あの、舞台とても素晴らしいです」

篠崎「ありがとうございます。それにしてもいい体して
るなあ、きみ」

美花「そりやあうちの駒形茂兵衛ですから」

篠崎「え、じゃあ『一本刀土俵入り』やるのかい？」

美花「はい、今年の市民文化祭で。お薦はわ
たしがやります」

篠崎「そうかあ。いいなあ。いや俺もいつか
はいつかはつて思つてるんだけど、俺もせ
がれもご覧のとおり細身だしね。似合いの
座員もいなくてねえ。できないでいるんだ
よ。いつそのこと腹にアンコ入れてやつて
やろうかつて思つたこともあるんだけどね。
それじやあ、お客様の心に響くいいものは

できないからねえ——高野くん」

教平「はい」

篠崎「駒形茂兵衛にうつてつけのいい体をしている。それになにより目がいいよ、きみ

は」

教平「目?」

篠崎「ああ。憂いのあるいい目だ。役者はつまるところ目なんだよ。きみならいい駒形茂兵衛を演じることができるはずだ。頑張ってみなさい」

微笑んでいる篠崎をじっと見る教平。

教平「はい」

強く頷く。

○青原地区公民館・大広間

『一本刀土俵入り』の稽古をしている一座。敬造から格闘場面の指導を受けている教平。何度もダメ出しを食らうが、真剣な眼つきで稽古をくり返す。

○農業振興道路（早朝）

上下スウェット姿で歩道を走っている教平。苦しそうに、途中で立ち止まつてしまふ。

膝に両手をつき荒い息を吐く。

教平「こんなんやつたら、あかん……」

顔を上げる。走り出す。

○山ヶ崎高校・小運動場・土俵

四股を踏んでいる教平と直人。

× × ×

すり足で土俵を回る二人。教平、ぎこちない動きだが、真剣なその眼つき。

× × ×

ぶつかり稽古をする教平と直人。

直人、ぶつかっては教平を投げる。それでもすぐさま立ち上がり、直人に向かっていく教平。

その様子を土俵下から見ている蘭子と内橋。

内橋「目の色変わったみたいに稽古するようになつたわ、高野」

蘭子「目え褒められましたから」

内橋「目え？」

蘭子「単純なんやから。でも長いつきあいやけど、教平ちゃんのあんな目えは見たことない——先生」

内橋「なんや」

蘭子「勝ちたい人がいるんですよね、神田先生」

輩」

内橋「ああ、北中から峰栄学園に行つた田中いう生徒や」

蘭子「峰栄の相撲部ですか」

内橋「うん。ほんまは神田も行くのが夢やつたそななんやけどな。ここ相撲部はその昔なかなかのもんでな。近畿大会の常連校やつた」

蘭子「あの、先生つてもしかして」

内橋「ああ、ここO Bや。近畿の決勝では峰栄に軽うにひねられたけどな」

蘭子「そうやつたんですか」

内橋「けど部員が入らへんようになつて、十
年ほど前に休部や。土俵とテツポウ柱残し
てな。知つてるか、体育倉庫の裏に丸太ん
棒突つ立つてるの」

蘭子「あ、はい。なんやろつて思つてまし
た」

内橋「その休部してた相撲部を神田が復活さ
せた。田中に勝ちたい一念でな」

蘭子「そつかー。神田先輩かつこええなあ」

内橋「高野もかつこようなりかけとる」

蘭子「えー、そうかなあ」

教平と直人のぶつかり稽古を見続ける

蘭子と内橋。

○体育倉庫・裏

立っているテツポウ柱に向かって、汗
まみれになり、何度も両手を打ち込み
続けるまわし姿の教平。

○山ヶ崎高校・旧宿直室

窓辺にたたずみ外を見ている美花。

部屋に入つて来る教平。振り返り教平を見る美花。会釈する教平。

美花「高野くん、こっち来てみ」

教平「はい」

靴を脱ぎ、六畳間に上がる教平。美花と少し離れて窓辺に立つ。

美花「稽古ない日はやつぱりここに来てしま

うよね、なんか」

教平「あ、です」

美花「落ち着くっていうか」

教平「はい」

美花「ええ匂いするやろ」

教平「はい」

美花、視線を落とし眼下に茂り、花をつけている銀木犀の樹を見る。

美花「銀木犀。わたしこの匂い大好きや」

教平「写真撮つてもらいました。入学式の時。

この樹の下で」

美花 「そうなんや」

教平 「はい。先輩からコサージュ付けてもらつた後で」

美花 「そうかあ。なんか縁があつたんかな、わたくしらつて——高野くん」

教平 「はい」

美花 「セックスはまだやで、わたし」

教平 「え」

美花 「卒業するまで待つてつて、言うてある。

浩一くんもそれでええつて言うてくれてるし——あ、キスはしたで」

教平を見る美花。美花を見つめる教平。やがてその視線を外して窓外を見やり。

教平 「お薦と茂兵衛の仲ですもんね」

美花 「うん——高野くん」

教平 「はい」

美花 「なんか、ここでうずくまつて泣いてたのが嘘みたいやね」

教平 「あのときは、ほんまにすみませんでした。なんか、自分が情けないです」

美花「今やつたら？」

教平「ぶちかまします。あんないきがつてるだけのヤンキーらなんか、神田先輩に比べたら鼻くそ以下です」

美花「ははっ。『鼻くそ以下』かあ。なあ、

八幡さんのお祭りのお相撲、高野くんも出るん？」

教平「はい」

美花「そつか、応援するわ」

教平「神田先輩、今、カミソリみたいですね」

みか「ラストチャンスやもんね、田中くんに勝つ」

教平「はい。そのためだけに先輩、ひとりで相撲続けてきたんやから。絶対勝つてほしいです。今、必殺技の練習台になってるんです、ぼく」

美花「必殺技。どんなん？」

教平「当日の楽しみにしどつてください。あれが決まつたら、神田先輩絶対勝てますー

ー黒沢先輩」

美花「なに」

教平「芝居の稽古、ちゃんとやります。けど、
今日から祭りまでの二週間は、毎日神田先
輩と稽古したいんです。それ言いにきたん
です」

美花「うん」

教平「八幡さんの相撲が終わったら芝居の稽
古に専念します。敬造さんにそう伝えてお
いてもらえますか」

美花「分かった。早よ行き。神田くんまわし
つけて待ってるで」

教平「ありがとうございます」

頭を下げ畳から降り、部屋を出る教平。

一人になる美花。また窓外を見やる。

微笑みを浮かべ、大きく鼻から息を吸
い込む美花。うつとりするその顔。

○山ヶ崎高校・廊下

放課後、歩いている教平の後ろから声
をかける末永。

末永 「高野」

振り返り末永を見る教平。

末永 「ちょっと顔貸せや」

末永、教平を睨む。その視線を逸らさない教平。

○前同・校舎裏

対峙している教平と末永。末永の後ろには同級生のヤンキーたちが四人。

末永 「顔貸してくれたついでに金も貸してほしいんやけどな」

教平 「なんでぼくが末永くんにお金貸さなあかんのや」

末永 「——これや。高野、おまえいつから俺によ、そんなえらそうな口きけるようになつたんや、オラ。最近のおまえ見てたらな、マジでムカつくんじや。なにを調子こいとるんじや。いつぺんシメたらなあかん思つてよ」

末永をじっと見る教平。

末永「なにメンチ切つとるんじや、おお！」

教平「ぼくは末永くんにお金貸す理由もないし、その気もない。帰るわ。相撲の稽古せなあかんのや」

末永に背を向け、歩み出そうとする教平。

末永「待たんかい、こら！」

末永、拳を振り上げ殴りかかるうとする。すかさず振り返り、その手首を左手で掴む教平。

末永「ぐつ……おまえ、なにやつとるんじ

や」

教平、末永の手首を握った左手に力を込める。

末永「離せ……離さんかい、こら」

右手で末永の額をがつちり掴む教平。

末永「ぐわつ」

教平「毎日握力鍛えてる。神田先輩のまわし

掴むのたいへんやから」

ぎりぎりと力を込める教平。

末永 「痛つ、痛いつ……」

末永の額を掴んだ右手にいつそう力を込める教平。

末永 「痛いつ、痛いつてえ！」

啞然となりその様を見ている後ろの四人。

末永 「やめろ、やめんかい！」

教平 「人にもの頼むときには、言い方がある
んとちがう、末永くん」

末永 「あああつ、やめて、やめてえ！」

教平 「やめてください、やろ」

末永 「やめて、やめてください！」

教平 「もう一度とぼくに絡んできいひんつて
約束してくれる？」

末永 「うええつ、するつ、しますつ、そやか
ら、やめてえ！」

教平 「お母さん助けてって、言うて」

末永 「な、なにを……」

教平 「きみらの親分みたいに」

末永 「うああつ！」

教平「言わへんの？」

末永「言うつ、言いますつ、お、お母さん、
助けてえつ！」

あまりの痛みに泣き出す末永。

末永「痛い、痛いよお……ママ、助けてえ……
：高野くんがいじめるんやあ……」

教平、動けないままの四人組を見て。

教平「ママつて呼んでるんやつて」

手を離す教平。うずくまりこめかみを
押さえ嗚咽する末永を見下ろして。

教平「ほんまはこんなんしたくなかった。け
ど、こんなんせんと末永くん分かつてくれ
へんやろ。なあ、もうほんまに絡んでこん
といでな。お金貸せとか言うてこんといで
な。分かつた？」

泣きながら何度も頷く末永。去ってい
く教平。末永、うずくまってベソベソ
泣き続けている。四人組、去っていく。

祭りの幟が何本も立てられ、屋台が数多く出でている。境内へと向かって歩いて行く人たち。

○前同・境内

能舞台があり、その壁の前に立つている直人。壁にはつてある奉納相撲のトーナメント表をじっと見ている。

やつてくる教平、美花、蘭子、健介。

健介「いよいよやな、神田」

直人振り向き、健介を見て小さく頷く。

蘭子「教平ちゃんの名前もあるわ」

教平「そら出るんやからあるわいな」

健介「田中とは別の山か。決勝まで当たらんのやな」

美花「そしたら田中くんが途中で負けたら、
神田くんがなんぼ勝つても対戦できひん
やんか」

健介「それはないやろ。あいつは決勝まで絶対に勝ちあがつてくる。なあ」

頷く直人。

蘭子「けど、なんかイヤな感じやわ、その田中っていうの。自慢たらし気に相撲のときにはこっち戻ってきて」

健介「まあ、優勝したら花代十万貰えるしな」

蘭子「十万！ マジ！ 神田先輩、頑張らな！」

健介「アホ。神田はそんなんどうでもええんや」

美花「前に高野くんが言うたとおりやわ」

教平「え」

美花「ほんまにカミソリみたいや神田くん」
トーナメント表をじっと見ている直人。

○前同・土俵（及びその周囲）

奉納相撲が始まる。まわしをつけた教平が土俵に上がる。土俵下に敷かれたゴザに座っている蘭子、美花、健介。内橋も。

蘭子 「がんばれ、教平ちゃん！」

四股を踏む教平。

美花の隣に敬造と玄次がやつて来て、
座る。

美花 「来たんや」

敬造 「来いでか。ええ体になつたやないか、
あいつ」

美花 「やろ」

敬造 「あれでこそ駒形茂兵衛のリアリティー
が出るつてもんやで」

仕切り線の前で手を突く教平。

行司 の軍配が返る。

行司 「はつけよい——のこつた！」

相手にぶつかつていく教平。

×

×

蘭子たちのところへ来る教平。

美花 「お疲れ様、高野くん」

教平 「すみません、応援してもらつたのに」

内橋 「ええ勝負やつたな」

敬造 「水入りの大熱戦。ええもん見させても

ろうたわ」

玄次「見直したで」

教平「ありがとうございます」

敬造「さすがうちの駒形茂兵衛や。明日からの稽古も性根入れて頼んだで」

教平「はい」

強く頷く教平。

蘭子「あつ、神田先輩出てきたで！」

土俵に上がる直人。高々と足が伸びる四股に、観客からどよめきと拍手がおきる。

× × ×

豪快に上手投げを決める直人。

× × ×

田中が土俵に上がる。でっぷりした巨躯にどよめきが起きる。

観客A「さあ大本命の登場や」

観客B「さすがの体やなあ。団体全国優勝、個人戦ベスト4は伊達やないで」

観客C「大相撲には行かへんのか」

観客A 「進学するらしいで。四年後には幕下
付け出しでデビューやろな」

観客B 「我が山ヶ崎町からも関取が生まれる
かあ」

観客C 「楽しみなこっちゃなあ」

鋭い目つきで田中を見つめる直人。

× × ×

対戦相手を子供扱いする田中。まわし
を掴み、相手を高々と吊り上げ、土俵
際を一周してから、そつと外へ置くよ
うにして勝負を決める田中。笑いとど
よめきがおきる。田中、余裕綽々の笑
みで勝ち名乗りを受ける。

蘭子 「なにあれ。ほんま気にいらんわ、あい

つ」

頷く教平。

× × ×

決勝戦。土俵に上がる直人と田中。歓

声が沸きおこる。

幾度かの仕切り直しの後、土俵中央で

向かい合う二人。

田中「久しぶりやな、どチビ」
無言で田中を見る直人。

田中「去年の二回戦といつしょや。五秒で叩きつけたる。障碍残つても知らんで。まあ十万貫て帰るわ」

二人、そのまま仕切り線の後ろへ。歛声の中、仕切る。
行司の軍配が返る。

行司「はつけよい——のこった！」

立会い。スッと背伸びするよう立ちはがる直人。虚をつかれる田中。すかさず懐に飛び込み両まわしを掴む直人。

教平「よっしゃ！」

そのまま押し込む直人。だが田中は動かない。笑みを浮かべて手を伸ばし直人のまわしを掴もうとする。

教平「先輩、腰、腰！ 腰振つて！」

直人、腰を何度も振つて田中の手を嫌う。

田中、力ずくで前に出る。その圧力に押され土俵際まで下がる直人。だがそこで踏ん張る。まわしを離さず必死で踏ん張る。

教平 「憶えてつ、先輩憶えて！」

田中、強引にまわしを取りに来る。

教平 「先輩、今やつ、足！」

その声に呼応するように、田中の左足を外掛けにする直人。驚く田中。少し押される。だが踏みとどまる。

教平 「掬つて！」

直人、左手をまわしから離し、すかさず田中の右膝裏に手をやり掬う。たたらを踏む田中。

教平 「頭つ、頭やつ、押せえつ！」

直人、田中の胸に頭を押し当て、そのまま一気に押して行く。

田中 「うわわわわっ！」

直人、そのまま田中を土俵下に押し倒す。

教平 「よつしやあ！」

両拳を突き上げる教平。

美花 「なあ、今のが必殺技！？」

教平 「はいっ、三所攻めです！」

大歎声と拍手が沸き起ころ。荒い呼吸で立ち上がる直人。横になつたまま動けないでいる田中。田中に手を差し伸べる直人。

その手をはらう田中。

田中 「まぐれじや、どチビが。ええ氣になるな」

直人、しばらく田中を見つめているが、やがてゆっくり土俵に戻る。

立ち上がると、そのまま歩き出す田中。

田中 「どかんかいっ、こんな田舎相撲になんの意味があるんじや、ボケ！」

騒めきの中去つてしまふ田中。

歎声と拍手の中、行司から勝ち名乗りを受ける直人。蹲踞の姿勢で手刀を切り、花代の十万を手にする。

土俵を降り、教平の前に立つ直人。

直人 「高野のおかげや。声、聞こえてたで」

教平、泣いている。

直人 「なんでおまえが泣いとるんや」

教平 「そやかて、そやかて……」

蘭子 「教平ちゃん、ほら！」

頷く教平。直人を肩車する。

直人 「高野、こら、おまえ」

そのまま土俵に上がる教平。直人を肩車したまま土俵を周る。

直人 「やめろ、やめんかいや」

泣きながら土俵を周り続ける教平。

直人 「やめろ、おい。やめろって高野……」

やがて直人も泣きだす。担ぐ教平、担がれる直人。二人泣きながら、大歎声と拍手の中、土俵を周り続ける。

○市民会館

市民文化祭当日。一座の『一本刀土俵入り』が上演されている。大詰三場へ

軒の山桜^ク、最後の場面。

美花（お薦）「『お名残りが惜しいけれど』」

教平（茂兵衛）「『お行きなさんせ早いところで。仲良く丈夫でおくらしなさんせ。ああお薦さん、棒ツ切れを振り廻してする茂兵衛のこれが、十年前に、櫛、簪、巾着ぐるみ、意見を貰った姐さんに、せめて、見てもらう駒形の、しがねえ姿の土俵入りでござんす』」

ひとり、桜の樹の下で佇む茂兵衛演じる教平に、万雷の拍手が降り注ぐ。

○山ヶ崎高校・校門前

（昭和六十二年度 山ヶ崎高校卒業証

書授与式）の看板が立っている。

○前同・校舎入り口前・長机の前

校舎入り口前に並べてある長机。その前に並んで一年生から胸にコサージュ

をつけてもらっている三年生たち。

教平と蘭子、三年十組の生徒たちにコサージュをつけている。蘭子の前に立つ美花。

蘭子「先輩、ご卒業おめでとうございます」

美花「ありがとう——蘭子ちゃん、ちょっとだけこないして後ろ向いてて」

耳に両手を当てる美花。

蘭子「え」

美花「お願ひ」

蘭子「——はい」

両耳に手を当て、後ろを向く蘭子。

美花、教平を見て。

美花「高野くん、あのとき痛かった？」

教平「え」

美花「あさかパラダイス行くときのバスの中」

微笑んでいる美花を見つめる教平。

教平「——はい」

美花「うん」

教平 「でも」

美花 「でも?」

教平 「お薦と茂兵衛の仲やないですか」

美花 「——うん、そうやんね——蘭子ちゃん、

もうこっち見てもええよ」

両耳から手を離し、向き直る蘭子。

美花 「卒業式終わったら、みんなでくじやくくや。神田くんも誘つてや」

教平 「はい」

美花 「そしたら、後でな」

去っていく美花。

蘭子 「『お薦と茂兵衛の仲やないですか』」「ギョッとして蘭子を見る教平。ニヤニヤしている蘭子。

教平 「聞いてたんやな」

蘭子 「バスの中も。後ろの席やつたしな」

ため息をつく教平。その背中を強く叩く蘭子。

(F・O)

○市民会館・大ホール・入口

【平成元年度・市民文化祭】の看板が立っている。

○前同・大ホール

満員の客席。ステージ上では山ヶ崎青原一座の公演が行われている。オリジナルの演目、そのクライマックス。

凛々しい女武芸者姿の蘭子、武者姿の健介と雅之が、抜刀して立ち向かってくる敵たちを斬りまくる。

やがて刀をぶら下げる出でてくる親分役の教平。対峙する教平と蘭子。

蘭子「健右衛門、雅之助、手を出すな！」

健介「しかしお蘭殿！」

蘭子「手出し無用つ、わたし一人でこの民を苦しめる悪鬼を、そして父の仇を討ち果たしてみせるつ、わたしが斃れた時は——そのときは頼む！」

雅之「お蘭殿！」

教平「ぬは、ぬはは。威勢のいいことよの。
だがしょせん女は女。そつ首跳ね飛ばして
くれるわ。来い！」

蘭子「覚悟！」

教平扮する悪党の親分に斬りかかって
いく蘭子。二人の剣戟場面。その見事
な太刀捌きに観客から拍手が起きる。
ギリギリと刀を合わせる二人。パツと
離れる。同時に向かっていく。

蘭子「とりやあああっ！」

教平の胴を払い、袈裟懸けに斬る蘭子。

教平「ぐあああっ！」

断末魔の叫びをあげ、ドウと倒れる教
平。会場から万雷の拍手。

○前同・大ホール前

舞台衣装そのままの姿で、観客たちを
見送っている一座の面々。

教平「奥原先輩、雅之さん、この度は本当に
ありがとうございました。おかげさまでい

い舞台になりました。殺陣の指導までして
いただいて」

健介「蘭子に頼まれたら断られへんよ。巡業
も一段落したところやつたしな」

教平「でもお二人ともさすがです。短い稽古
期間やつたのに」

雅之「親父が教平くんの台本褒めてたよ。

『よく書けてる、うちの座付き作家にほし
い』

つて」

健介「来年座員になるか、蘭子みたいに」

教平「ははは」

雅之「教平くんは、文学勉強しに大学行くん

だもんな」

教平「はい、そのつもりです」

雅之「うん。でもいつかうちの一 座にも台本
書いてほしいな。ぼくも今度の台本とつて
もいいって思つたからさ」

教平「はい、ありがとうございます。けど先
輩、ほんまに入るんですか蘭子」

教平、観客の同級生たちに囲まれ、ポーズを決めたり、写真を撮つてもらつたりして悦にいってはしゃいでいる蘭子を見る。苦笑いして頷く健介。

健介「止めてもきかん女やからな。よう知つてるやろ」「

教平「はあ」

雅之「健ちゃんの傍にいたいっていう一途な気持ちじやん。でも蘭子ちゃん入つたら、お姫様役に困らなくなるな、うちの一一座も」

健介「いやあ、とてもお姫様いうガラやないで、あれは」

笑う三人。

雅之「そうだねえ。どっちかつていうとほら、お薦やつたあの子」

教平「黒沢先輩ですか」

雅之「そうそう、黒澤さん。あの子の方がお姫様タイプだよね。進学したんでしょ。帰ってきて観にこなかつたの?」

教平「はい。去年は観にきてくれたんですけど――敬造さんに訊いたんですけど、なんかおかしいんですよね」

健介「なにが？」

教平「なんというか、反応がおかしいんですね」

よね」

健介「そうやなあ、稽古のときもなんか前より元気なかつたもんなあ」

喧騒を離れ、腕を組んで一人佇んでいる敬造。

○山ヶ崎高校・図書室（昼休み）

大机を前にして座り本を読んでいる教平。そこに近づいてくる女子生徒。

真希「あの、すみません」

顔を上げる教平。真希を見る。

真希「高野先輩ですよね」

教平「そうやけど」

真希「わたし、一年六組の秋本真希って言います。この前の市民文化祭におばあちゃん

といっしょに行つたんです。あの芝居も
観ました」

教平「そう」

真希「すごく面白かったです。あの台本、先
輩が書いたんですよね」

教平「え、なんで知ってるのん?」

真希「パンフレットに書いてありましたから。

でも先輩すごいですよね、台本なんて書け
るんやから。憧れます」

教平「見よう見まねっていうやつや」

真希「あの、笑わんといてくださいね。わた
しの将来の夢、小説家なんですね」

教平「うん。いや、べつに笑つたりせえへん
よ」

真希「あの、先輩それなに読んでるんです
か」

教平、一旦本を閉じタイトルを真希に
見せる。

真希「山田、かぜたろう全集」

教平「風太郎」

真希 「あ、 そうなんや。 おもしろいですか」

教平 「とびきりや。 今いろんな忍法使いが脳ミソの中飛び回ってるわ」

真希 「忍法使い、 へえ」

教平 「好きな作家とかいてるの？」

真希 「赤川次郎さん、 好きです。 あと、 氷室冴子さんも」

教平 「そつか。 ぼくも中学校のときようよん
だで赤川次郎。 『セーラー服と機関銃』も
好きやけど『プロメテウスの乙女』、 あれ
がいちばん好きやな」

真希 「えつ、 わたしもすごく好きなんです、
あの作品！」

微笑んで真紀を見る教平。

○山ヶ崎高校・旧宿直室

少し距離を開けて窓辺に立つて外を見
ている教平と蘭子。

蘭子 「部屋にずっとこもって出てこんらし
いわ。 黒沢先輩アホや——避妊する節度も

あらへんやなんて、正直幻滅したわ」

教平「そんなん、言いなや」

蘭子「相手知ってるか。つきあつてた彼氏と
ちがうんよ」

教平「え」

蘭子「すごい大きなお寺の息子なんやで」

教平「——そうか」

窓外を見る教平。

ドアが開く。真希が立っている。

真希「買つてきましたあ！」

カップ麺の入った袋をかざす真希。

○〈ちぐさ〉店内（夜）

のれんのしまわれた店内。カウンター
席に座っている教平と敬造。洗い物を

している淑乃。

敬造「ひいじいさんになるんやで」

教平「あ、そうですよね」

敬造「子供が二十歳になるまで養育費出すつ
て念書もらつたからな。後腐れなしや」

教平「結婚、するとかは」

敬造「ごつつい寺の御曹司やからな。檀家へのメンツいうもんがあるんやろ。ハナから錢の相談から入ってきたわ。しようもない」

グラスのビールを呷る敬造。

教平「先輩、お元気ですか」

敬造「ああ。大きな腹して、飯食うときだけ部屋から出てきよるわ」

教平「そうですか。よろしくお伝えください」

敬造「ああ——ボクよ」

教平「はい?」

敬造「ただの肥えた子、なんか言うて悪かつたな」

教平「いえ。ただの肥えた子でしたから」

微笑みながら洗い物を続ける淑乃。

○八幡神社・境内

祭りの日、奉納相撲の最中。土俵上、

教平と直人の一番。

がつぶり四つの両者。土俵中央で動かない二人に拍手が湧く。やがて土俵際まで直人を押し込む教平。懸命にがぶり寄る。身を仰け反らせ悚える直人。

しばらくの後、豪快にうつちやりを決める直人。勝負あり。

土俵下に倒れこんだ二人。先に立ち上がる教平。直人に手を差し出す。

教平「やつぱり勝てませんでした」

直人「百万年早いわ」

教平「花代貰つたら、くじやくのお好み、おごつてくださいよ」

直人「おう、任せとけ——共通一次がんばれよ、高野」

教平「はい」

拍手の中、教平の手を取り、立ち上がる直人。

（平成二年度 山ヶ崎高校卒業証書授与式）の看板が立っている。

○前同・校舎入り口前・長机の前

校舎入り口前に並べてある長机。その前に並んで一年生から胸にコサージュをつけてもらっている三年生たち。

その列の中に教平もいる。並んで蘭子も。

三年生女子にコサージュをつけているのは真希。真希の前に立つ蘭子。

真希「先輩、ご卒業おめでとうございます」

蘭子「うん、ありがとう。あと頼んだで」

真希「はい。新入生めちゃくちや勧誘します。

心配せんといてください。先輩も頑張って
くださいね」

頷く蘭子。

蘭子「これよりは、愛しの君との旅がらす、
なんの不足があるものか？」

声をあげて笑う二人。

真希、教平にコサージュをつけようとしていた男子生徒から、それを奪い取り、教平の胸に付け始める。

真希「あとで第二ボタン、くださいね」

教平「え」

教平を潤んだ目で見る真希。

蘭子「ういー。ひゅーひゅー」

教平の頬を拳でグリグリする蘭子。されるがままになつている教平。

○前同・校庭

銀木犀の樹の下に並んで立ち、桑田に写真をとつてもらつている教平と蘭子。その様子を見守つている淑乃と信代。

○高野家・居間兼台所

寝間着に腹巻姿の教平が現れる。朝食を作つている淑乃。

淑乃「おはよう」

教平「——おはよう」

淑乃「早よ歯あ磨いてきいや」

教平「うん」

部屋を出ていく教平。

×

×

×

淑乃の心づくしの朝食を食べている教平。向かい合って座る淑乃、嬉しそうにその様子を見ている。

淑乃「お父ちゃんにチンチンしてから行きや」

教平「分かってる」

淑乃「山梨か、遠いなあ」

教平「うん」

淑乃「腹巻、忘れんともつて行きや」

教平「分かってる」

淑乃「おかわりは?」

教平「うん」

教平の差し出した茶碗を受け取る淑乃。

○前同・仏間

仏壇前に正座して鈴を鳴らし、静かに

手を合わせる教平。

立ち上がり、部屋を出る。

前同・玄関先

信代の車がアイドリング状態で止まつ
ている。立っている信代。

玄関からボストンバッグを持って出て
くる教平。続いて淑乃も。

淑乃「そしたら信代さん、よろしくお願ひいし
ます」

信代「了解。ほら教平ちゃん、お母ちゃんとに
ちやんと挨拶せな」

向かい合う親子。

教平「夏休みや正月は帰つてくるから」

淑乃「うん」

信代「それだけかいな。まあ蘭子も遠足行く
みたいにして出てつたけどなあ。うちの人
ボロボロ泣いてるのに——よつしや、そし

たら行こか」

教平「はい、お願ひします」

信代の助手席に乗り込む教平。信代も運転席へ。

発車。遠ざかる車をじっと見ている淑乃。車、やがて視界から消え去り。

信代「ただの肥えた子産んだ覚えはないんやで」

淑乃、少し涙ぐむ。

○バスターミナル・外

信代の車が停車する。助手席から降りる教平。信代に深く頭を下げる。クラクションを鳴らし、去つていく信代の車。教平、ターミナル舎内へと入つて行く。

○前同・舎内

いくつか並べられたベンチに座つている教平。舎内のドアが開く。見る教平。

教平「黒沢先輩……」

美花、微笑み立つてゐる。

×

×

×

美花「お家に電話かけたんよ。今日発つって

蘭子ちゃんから電話もらつたん」

教平「蘭子が」

美花「うん。声、聞きたあなつて。そしたら
お母さんが電話に出て、さつき出たつて言
われて。お父さんが仕事行くついでに乗せ
てきてもらつたんよ。間に合つてよかつ
た」

教平「先輩」

美花「子供な、先月産まれた。女の子なん

よ」

教平「はい、敬造さんから聞いてます」

美花「うん。幸恵って名前。わたしがつけた。
幸せに恵まれるようについて」

教平「そうですか」

美花「ふられてんよ、わたし」

教平「え」

美花「大学入つてから一年間はつきあつてた
んやけどな、他に好きな女が出来た、なん

て言われて。そんでから、しばらくして友達に誘われた合コン行つてな。そこで出会つた男とそのままラブホ。で、今に至る。ははは、アホやろ」

笑う美花の横顔をじっと見る教平。

美花「高野くん憧れの黒沢先輩は、思つている以上にアホなんよ」

教平「先輩」

美花「自棄になつてたんやなあ。もうどうにでもなれつて。『俺、つけんとしたことないねん、ええか』つて訊かれて『大丈夫な日やからええよ』つて。全然大丈夫な日やなかつたんやけどな——ごめんな、こんな話して。ハレの日やのにな」

教平「いえ」

美花「けどな、幸恵産んだことは後悔してへんのや」

教平「はい」

美花「高野くん、文学勉強するんやろ」

教平「はい」

美花 「頑張つてな。学生の本分は勉強やで——
——つておまえに言われたないわなあ」

笑う美花。

駐車場の停車エリアにバスが入つてく
る。

美花 「あ、バス来たわ。行かな、高野くん」
立ち上がる美花。教平も。

○前同・駐車場

停まつているバスへと歩いて行く二人。

美花 「たまには帰つてくるんやろ」

教平 「はい」

美花 「そのときはまた会いたいな——会つて
くれる?」

停車中のバス、開いている後部扉の前
に立つ二人。教平、美花をまつすぐ見
て。

教平 「当たり前やないですか。そのときは三
人で会いたいです。幸恵ちゃんも連れてき
てください」

美花 「高野くん、あんたはほんまに——」

教平 「お薦と茂兵衛の仲やないですか」

美花 「うん、そうやんね」

教平 「はい」

美花 「けど、四人かもなあ」

教平 「え」

美花 「かわいい彼女連れて帰つてきてたりして。蘭子ちゃんから聞いたで。後輩の女の子に第二ボタンせがまれたんやろ。モテモテやん」

教平 「あのしやべり……」

微笑んで教平を見つめる美花。

美花 「『何だか少し心細いねえ』」

教平 「え？」

美花 「『何だか少し心細いねえ』」

美花、くり返す。お薦の台詞だと気づく教平。

教平 「『いやあ大丈夫です、わしは、石に咬りついても横綱に出世しなけりや』」

二人『一本刀土俵入り』の台詞を交わ

し始める。

美花 「『その料簡でみッちりおやり。名は何
ていうのだい』」

教平 「『わしは、駒形と名を付けて貰つてい
ます。駒形というのは故郷の名だ。名は駒
形茂兵衛といいます』」

美花 「『駒形茂兵衛だね』」

教平 「『あい。姐さん、わし出世して三段目
になつても、二段目になつても、幕へはい
ろうが、三役にならうが、横綱を張るまで
は……』」

教平の目から涙が零れる。

教平 「いかな、いかなことがあつても駒形茂
兵衛で押通します」

教平、涙を拭う。

美花 「それだとあたし直ぐわかつていいねえ。
じゃあ、お行き、左様なら姐さん』」

教平 「『はい。左様なら姐さん』」

美花 「『出世を待つてるよ』」

教平 「『はいッ』」

ステップに足を掛け、バスに乗り込む教平。そこで向き直る。美花に頭を深く下げる。その様をじつと見ている美花も涙ぐんでいる。

美花「『——あれ、まだこっち向いてお辞儀してる。そんなに嬉しかったのかねえ。駒形——』

発車ブザーが鳴る。意を決するように美花に背を向ける教平。

○バス・車内

最後部の座席に腰を降ろす教平。

○バスターミナル・駐車場

バスが発車する。道路へと出る。その様を泣きながら見ている美花。

美花「『お名残りが惜しいけれど』」

美花、つぶやくように言つて。やがて見えなくなるバス。

○バス・車内

うつむいてる教平。泣いている。泣きながら——。

教平「『おいきなさんせ早いところで。仲良く丈夫でおくらしなさんせ』——」

教平の涙。『一本刀土俵入り』、茂兵衛最後の台詞を続ける教平。

教平「『ああお薦さん、棒ツ切れを振り回してする茂兵衛のこれが、十年前に、櫛、簪、巾着ぐるみ、意見をもらった姐さんに、せめて見て貰う駒形の、しがねえ姿の、土俵入りでござんす』——」

言い終えた教平、ゴシゴシと拳で涙を拭う。そしてキツと顔を上げる。

走り続けるバスの中、まっすぐ前をみている教平。

(了)